

作家の五木寛之さんは「過去と現在と未来」（三世）の時間に、それぞれ「回想、思想、空想」を対応させてうまい言葉を述べられている。私が思うに、自己の慰めのためには回想もいいかもしれないが、新たな力が湧く訳ではない。天下泰平の利他回向の志あらば、やっぱり、今のこの時において思想力ならびに空想力を磨く他はないだろう。

寝る時に浮かんで来ることは何なのか。

- ・¹生まれた時から昨日までのこと（過去のこと）
- ・²今日の出来事（現在のこと）
- ・³明日以降の計画や希望・夢（未来のこと）

私は大凡上から1：2：7だろうか。

日頃意識している仲間・対人関係の対象はどうだろうか。

- ・^A昔の回顧に熱心な人（過去系）
- ・^B現時の社会問題に関心が強い人（現在系）
- ・^C未来の理想や夢を語る人（未来系）

私は大凡上から1：3：6だろうか。

さて、今に億兆の言葉を以って現状の愚痴を吐いても詮ないこと、人間みなに、私にも未経験ゾーンの未来がやって来る、未来（未開・未発の時空）が待っている。ホーキング博士——イギリスの理論物理学者／学生の頃に筋萎縮性側索硬化症『ALS』を発症した『車椅子の物理学者』が提唱した「時空4次元（空間3方向＋時間）宇宙モデル」の援けを借りる。そのイメージはインターネット「Back to the past」掲示の図—**1**のとおりで、縦軸に時間の流れを、横軸に空間の広がりを重ねたものである。

物理的な意味合いについてはいちいち説明しない。私がこのイメージ図から読み取る学びの一端である。時間経過と空間との相対関係で『今』に着目する。『今』は『未来』域を吸い寄せ、『過去』域へ掃き出す。あるいは、過去域を置いて、未来域を迎えに行く。過去域内・未来域内においては、共にもの・こと（実存視認するものではなく、素粒子の先にある何か）が直線状に整列したものではなく、ランダムに散乱・充満している。時間は刻々と流れる、相対的に空間も刻々と流動する。まだ見ぬ世界、初見の世界が途切れることなく押し寄せて来る、そして、記憶の彼方へ放出して行く。

そうすると、今と発したその直後は、同時にと言ってもいい、未来から過去への（過去から未来へと観ても良い）一瞬の180度転換点とも言える。未来・過去という対極域の転換点が故に今という時空は「今=0=無・空・中」と解せる。また、今は過去と未来を凝縮した結合点・集積点・集合点、対極両域の統合点とも解せるが故に今は「今=∞=無限大」でもある。点は大きさや方向を持たない、ただあるという位置のみである。「無いものは無い」（有ると無いのが同時混在）の世界である。

『今』とはこの一刻・一瞬である、今と発したその直後は、同時にと言ってもいい、何もかも（自身に直接係ることはもちろんだが、その周辺環境も）が過去域にどんどん折り畳まれて行く。今になって過去のことを反省しても、悔やんでも、懺悔しても、あの卑近な言葉を取り消すと嘆いても、いくらお金を積んでも消すことは出来ない。未来のことを想像したとしてもこの精神作用は今のこの一瞬である、よって、将来に対する想像や不安・心配事も全て過去域に折り畳まれて行く。

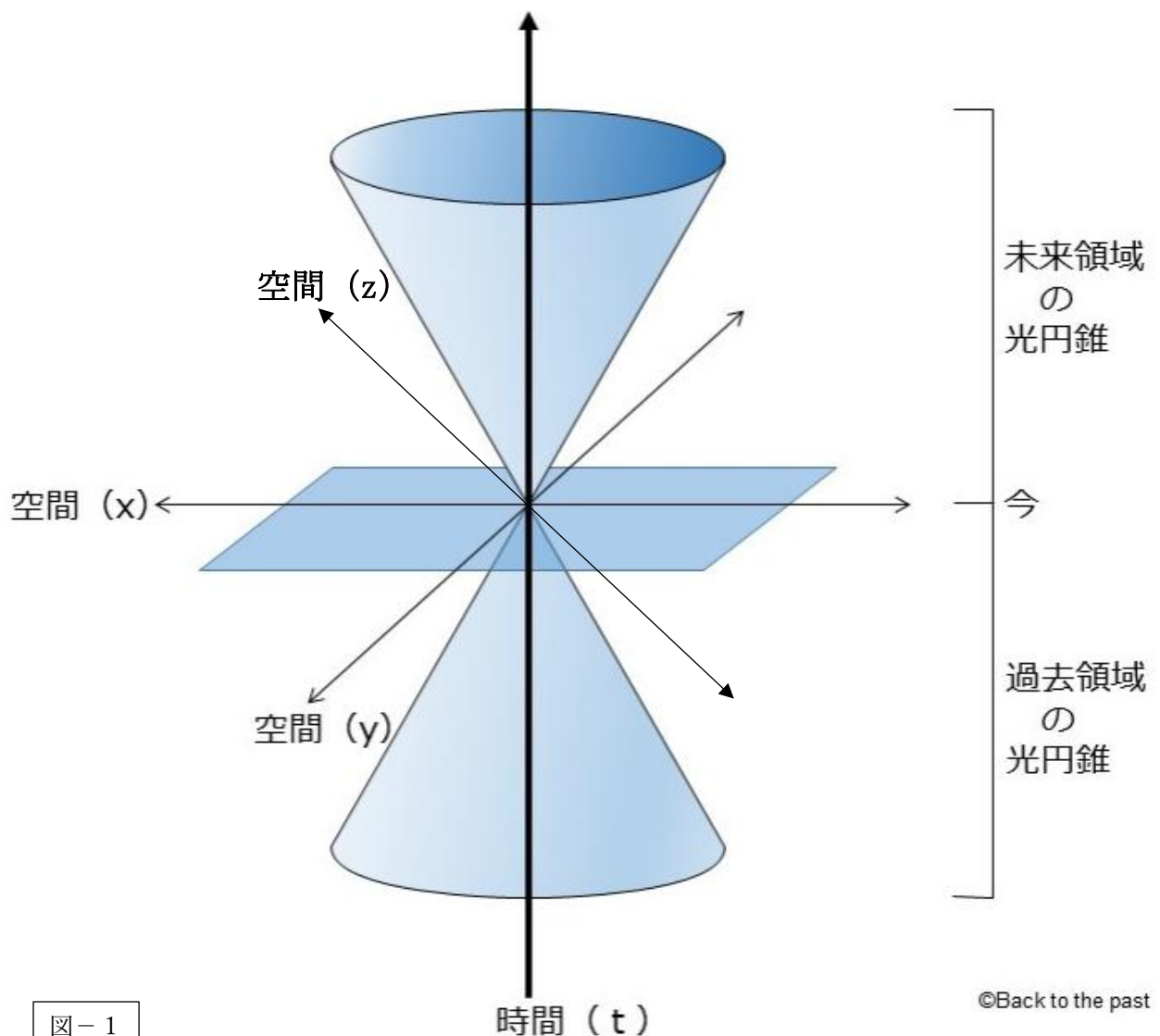


図-1

デジタル2値化視点——ある=1、ない=0^(non)——を取り入れると「 $1=\infty$ 、よって、 $\infty=1$ 」である。一方、『無限大』という極の世界は世の森羅万象を含む意であり、統合された分別不可の世界、つまり、『無・空・中=0』でもある。有ると言えば有る、無いと言えば無い、の世界である。よって、今この瞬時は「 $0=\infty=1$ 」なのである、対立・対極・矛盾にあるもの・ことの同時存在である。「無分別智」の世界である。「有るものはあると、無いものはない」は表裏の関係である。なのに、私はこの今を、好き嫌い、善悪、美醜の色眼鏡で分割・分別して誇るようになる、これが人間界の「分別知」の世界（扇形セクター）である。これが諸々の争いの根源となる。「無分別智」の世界をかじりたいと自戒を込めて思うこの頃である・・・。

過去への後戻りの言葉は、(そんなこと)「①出来ない、②無理だ、③やったことない」、未来への希望の言葉は「④私の仕事じゃないと言わない(それも私の仕事だ)、⑤利他、⑥先回り」の寛大(菅大)三美言が浮かんだ。

ところで、鈴木大拙著「日本人的靈性」（角川ソフィア文庫）にある一説を取り上げる。

図(表)－2のとおりのフレーズがある。総てが納得、感激するばかりである。

(p 28)・・・日本精神などいうときの精神は、理念または理想である。・・・理想というと、将来すなわち目的を考えるが、而して精神にはむしろ過去がついてまわるようであるが、事実の上では、精神はいつも未来を孕んで意識せられる。未来につながらぬ精神、懐古的にのみ挙揚せられる精神は、生きて居ないから、実際は精神でない。・・・

(P389) 禅の生き方は、(一つのもの・ことに対して) いつも一方に肯定をおき、また、一方に否定をおく。その二つは絶対的に矛盾する。それをそのままにしておく、否定にも依らず、肯定にも依らない。そしてそこで一句を言えと、迫って来るのである。この一句が絶対の一句である。

図(表)－2

(end)